

「経済史」

問1

ポメラントの「大分岐」論について、その問題設定と中心的主張を正確に理解できているかを問うている。あわせて、近代以前のヨーロッパとアジアの生活水準をどのように比較するかという論争の構図を踏まえつつ、ポメラントの議論がその中でどのような位置を占めるのかを、歴史的文脈の中で論理的に説明できるかを求めている。

解答としては、次のようなポイントについて記述することが望まれる。ポメラントは、18世紀末までの段階では中国江南とイングランドのようなユーラシアの先進地域どうしの生活水準に大きな差はなかったと論じた。そのうえで、19世紀初頭以降に西ヨーロッパと東アジアのあいだに大きな所得格差が形成された要因として、ポメラントは石炭によるエネルギー制約の緩和と、アメリカ大陸からの綿花・食料供給による土地制約の緩和を重視したことを説明する必要がある。また、近代以前の生活水準比較をめぐっては、18世紀末まで東アジアとヨーロッパの生活水準は概ね同水準であったとする見解と、18世紀の段階でイングランドなどヨーロッパの一部が相対的に高い生活水準を実現していたとする見解とが対立していること、この論争の中でポメラントの議論が大きな位置を占めていることに触れることが求められる。さらに、近年では日本の畿内なども含めた比較研究が進み、地域差や発展経路の多様性を踏まえて分岐の時期と程度を再検討する研究が蓄積されていることまで示せばより望ましい。

問2

普仏戦争を、19世紀後半のヨーロッパ経済の発展の中に位置づけて理解できているかを問うている。あわせて、同戦争を軍事・外交上の事件としてのみ捉えるのではなく、戦争以前から進行していたドイツとフランスのそれぞれの経済発展のあり方を踏まえ、その延長上に位置づけて説明できるかを求めている。

解答としては、次のようなポイントについて記述することが望まれる。ドイツについては、戦争以前の段階で、関税同盟の進展に加え、鉄道網の拡大、ルール・ザールなどにおける石炭・鉄鋼生産の伸長、重工業・機械工業・化学工業の成長を通じて工業化が進展していたことを説明する必要がある。さらに、普仏戦争を経て成立したドイツ帝国のもとで、法制度・通貨制度などの統合が進み、その結果として取引費用の低下と資本動員の効率化がいつそう進むことで工業化の基盤がいつそう強化されたことを示すことが求められる。他方、フランスについては、戦争以前の第二帝政期に、鉄道建設、都市改造、銀行・証券市場の発展を通じて経済発展を実現していたことを示す必要がある。この経済発展を、投資銀行を軸とする金融主導型の発展経路として位置付けることもあり得るであろう。そのうえで、普仏戦争後については、フランスからドイツへの賠償金支払いが公債発行と金融市場の吸収力によって進められ、復興と両立したことに触れることが望まれる。さらに、戦後賠償金の支払い

がロンドンを通じた国際金融の仕組みの中で処理されたことにまで言及できていれば、より望ましい。